〈余滴1〉

原子力のタブーを打破しよう

村田光平

今、日本社会は、不況や北朝鮮問題などに目を奪われ、はるかに悲惨な「日本の破滅」が現実に迫りつつあることを知らずにいます。

それは、いったん起こってしまえば鎮圧不可能で、何百何千万人に被害を及ぼし、しかも幾世代にも及ぶ大災害となり得るもの、つまり「原発大事故」の発生です。しかし、タブーの存在により、国民はそれを知ることを妨げられております。

私は一年ほど前に、一九七三年に欧米で大問題となった製法による原発が、日本では十基余りもそのまま運転されている可能性があるとの情報を得ました。

この製法によれば、原発の核心部分である圧力容器に毛状の亀裂が無数に生ずるとのことです。何人かの報道関係者がこれを記事にすることを試みましたが、取材活動は中断されました。タブーの故なのでしょう。しかし、今年八月八日発売の「週刊金曜日」は遂にスクープ記事としてこれを報ずるに至りました。政府は徹底的な解明を行う義務があります。

わが国の原子力政策は、次の通り国民の生命の安全を脅かすものとなっており、転換が求められます。①マグニチュード8クラスの大地震の発生が予測されている東海地方のど真ん中に四基の浜岡原発が存在する。②最悪の場合、世界の人口の半分近くの犠牲者を生む可能性のある六ヶ所村の再処理工場で、最近三百ヶ所余りの不正溶接が発見された。③六ヶ所村は、ノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊氏が、その危険性から「絶対反対」との立場をとる、国際熱核融合装置の誘致を決めている。

私は今年八月、以上の趣旨を盛り込んだ書簡を各方面に発出したところ、心強い反響を得ています。九月十日には静岡県庁で記者会見を求められましたが、翌十一日付の中日新聞は会見の写真入りで「原発震災」に備えた防災訓練をすべきであるとの私の訴えを大きく報じました。この記者会見の模様は、朝日、静岡新聞などでも同日に報じられ、タブー破りの成果はあがっています。

私は今後とも原子力の危険性に関する「恐るべき沈黙と無関心」を揺さぶり続ける所存です。

何卒、日本のため、未来の世代のため、そして人類のため御尽力をお願い申し上げます。

（本学教授）

〈余滴2〉

『恋路ゆかしき大将』巻五の筆者

宮田光

『恋路ゆかしき大将』は、鎌倉時代末期の成立と思われる中世王朝物語である。伝本は九条家旧蔵本（巻一～巻四）と宮内庁書陵部蔵本（巻五）の二冊のみである。

九条家旧蔵本は、金子武雄氏により、『我身にたどる姫君』と共に国文学研究資料館に寄託されている。この二冊は同筆、同体裁である